

第1章 序論

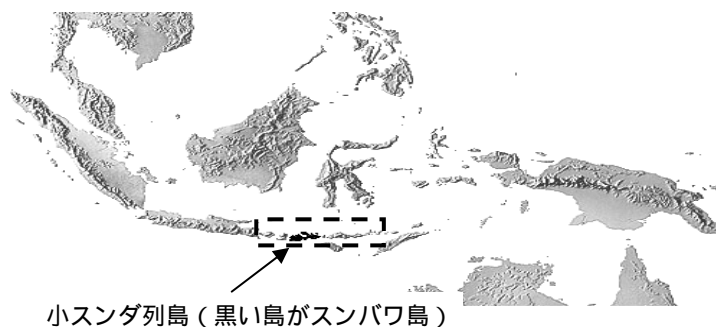
この章ではスンバワ語を取り巻く社会的・地理的環境、および、本研究の背景について述べる。構成は以下のとおりである。

- 1 スンバワ語が話されている地域
- 2 スンバワ語の方言
- 3 スンバワ語をめぐる多言語状況
 - 3.1 国語インドネシア語とスンバワ語
 - 3.2 スンバワ県における他言語話者
- 4 先行研究
- 5 本研究の背景（データ）

1 スンバワ語が話されている地域

スンバワ語は、インドネシアのスンバワ島で話されている言語である。本研究では、この言語の中心的な方言であるスンバワ・ブサル方言の文法を扱う。この言語および民族名の自称は、サマワ（Samawa）であるが、本論文では一般的慣習に従ってスンバワという呼称を用いることにする。

スンバワ島は、小スンダ列島（マレー半島の南からニューギニア島の南西部までの東西に広がる列島）に位置し、行政的には、インドネシア共和国の西部ヌサ・トゥンガラ州（Nusa Tenggara Barat）に属する。スンバワ語話者の居住地は、この島の西半分（地図 1-3 参照）であり、行政的にはヌサ・トゥンガラ州のスンバワ県および西スンバワ県に属する¹。

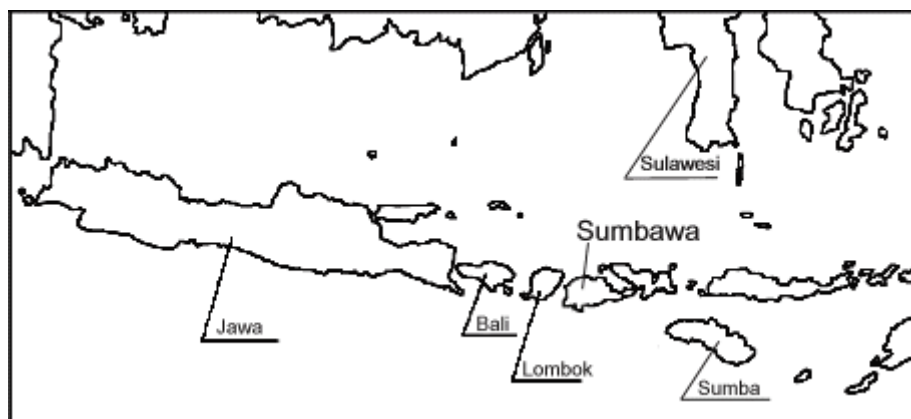


地図 1-1 スンバワ島の位置 1

¹ 州はpropinsi、県はkabupatenの訳である。2005年現在、インドネシアにはジャカルタ首都特別区、ジョグジャカルタ特別州、アチェ特別州を含めて30の州がある。

ちなみに、文化人類学的研究でやや有名なスンバ島は、スンバワ島の南東部に位置する別の島である。（地図 1-2 参照）

1.1 スンバワ語が話されている地域



地図 1-2 スンバワ島の位置 2

SIL international (2005)の統計によれば、スンバワ語の話者数は1989年の時点でおおよそ30万人で、そのほとんどすべてがスンバワ県内に居住している。スンバワ語話者は、ほとんどがインドネシア語との二言語併用者である。また、ほとんどすべてがイスラム教徒で、多くが農業、牧畜、漁業などの第一次産業に従事している。

スンバワ語地域の東隣（スンバワ島の東部）では、ビマ語が話されている。また、スンバワ島の西隣に位置するロンボク島ではササク語が話されている。（地図 1-3 を参照されたい。）

スンバワ語は、一般に、バリ島のバリ語、ロンボク島のササク語とともにオーストロネシア語族、マレイ＝ポリネシア語派の中の、バリ・ササクグループに分類されている²。このグループは西マレイ＝ポリネシア語派の東端に位置し、さらに、スンバワ語はこのグループの東端に位置するため、この分類に従えば、スンバワ語と東隣のビマ語との間に西マレイ＝ポリネシア語派の境界線がひかれることになる。ただし、スンバワ周辺の言語に関して、このような分類の妥当性を検証するに足るデータは、現時点では十分に得られていない。

2 スンバワ語の方言

Mahsun(1999)によれば、スンバワ語の方言は次の四つに分類される。以下の方言、および近隣の言語の分布を地図 1-3 に示した。

(1) スンバワ・ブサル (Sumbawa Besar) 方言 (本研究が扱う方言)

スンバワの中心都市スンバワ・ブサルをはじめ、スンバワ県の広い範囲で話されている。

(2) タリワン (Taliwan) 方言

スンバワ北西部、西スンバワ県の県都タリワンを中心に話されている。

2 Tryon (1995:27)などによる。

1.2 スンバワ語の方言

(3)ジェレウエ (Jereweh) 方言

スンバワ南西部，西スンバワ県ジェレウエ市を中心に話されている。

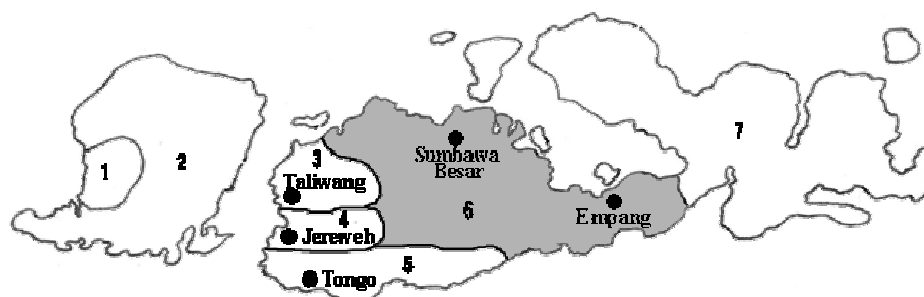
(4)トンゴ (Tongo) 方言

西スンバワ県南部のトンゴ市を中心に話されている。

4つの方言間の差異は大きく，原則として，方言が異なる話者間の意思の疎通は不可能である。スンバワ語話者はこれらの「方言」とその他の言語を概念上区別していないようで，ここで方言として扱った「ことば」に対しても，インドネシア語などより差異の大きい「ことば」を指すのと同じ単語 *basa*「言語」を用いる。(たとえば，タリワン方言は *basa=Taliwan*、インドネシア語は *basa=Indonesia* となる。)

ただし，言語学的にみると，4つの方言はほとんどの語彙が対応を示しており，形態論的にも統語論的にも非常に似ている。これらの方言の相互理解を不可能にしているのは，主に音韻変化による語彙の差異である。このことを根拠にここではこれらの言語を一つの言語の方言であると考えことにする。

4つの方言のうち，スンバワ・ブサル方言は他の方言の話者もある程度習得している。方言の異なるスンバワ語話者が話す場合はスンバワ・ブサル方言が用いられ，この方言はスンバワ語話者の間で「共通語」としての地位を持っているようである。



バリ語 (Balinese)	1
ササク語 (Sasak)	2
スンバワ語	3
(Sumbawan) Taliwang 方言	3
Jereweh 方言	4
Tongo 方言	5
Sumbawa Besar 方言	6
ビマ語 (Bima)	7

地図 1-3 近隣の言語とスンバワ語の方言の分布

3 スンバワ語をめぐる多言語状況

3.1 国語インドネシア語とスンバワ語

インドネシアはその住民が数百の民族に分類される多民族国家であり、話されている言語も多様である。インドネシアで話されている言語の数について確かなデータはないが、SIL International の Ethnologue (2005)はインドネシアの言語として 742 言語(うち三言語は死語)をリストしている。その多くがオーストロネシア系の言語であるが、パプア州(ニューギニア島の西半分)および東部南東諸島州 (NTT, Nusa Tenggara Timur), マルク州(Maluku), 北マルク州(Maluku Utara)ではパプア系の言語も話されている。

このような多様な言語集団の共通の言語として、国はマレー語を「国語」(インドネシア語)として定めている³。インドネシア全域において行政、教育の言語として用いられるのは原則としてこの言語である⁴。

3 インドネシア憲法第 36 条にBahasa Negara ialah Bahasa Indonesia 「国語はインドネシア語である」と記されている。

ただし、その一方で、憲法第 36 条の付則に次のような「地方語の尊重」にかかわる記述もある。(訳は筆者による。)

Di daerah-daerah yang mempunyai bahasa sendiri yang dipelihara oleh rakyatnya dengan baik-baik (misalnya bahasa Jawa, Sunda, Madura, dan sebagainya) bahasa-bahasa itu akan dihormati dan dipelihara juga oleh negara. Bahasa-bahasa itu pun merupakan sebagian dari kebudayaan Indonesia yang hidup. (TENTANG PASAL-PASAL, Pasal 36)

人々に守られている地域の言語(たとえばジャワ語、スンダ語、マドゥラ語など)を持つ地域においては、そのような言語も国によって尊重され大切にされる。そのような言語もインドネシアの生きている文化の一部である。(第 36 条の付記)

4 マレー語には、古くから書きことばや公的な場面で用いられてきた標準的変種と交易などで用いられてきた非標準的変種が存在する。現在教育や行政など公的な場面で使用されているインドネシア語は前者に近いものであるが、スンバワ語話者が日常的に用いているのは後者に近いものである。

前者(標準インドネシア語)と後者(スンバワ方言)の間にみられる大きな差異の一つに、前者にみられる態にかかわる接辞の使用が後者には見られないことがある。たとえば以下の(i)(ii)のような違いがある。

(i) 標準インドネシア語では、他動詞のいわゆる能動態において、接辞 *meN-* (N は原則として語基の最初の音と調音位置が同じである鼻音)を伴う動詞が用いられる。スンバワ方言ではこの接辞は用いられず、常に動詞語根がそのまま用いられる。例えば、「アリは友だちを誘う」という内容が、標準インドネシア語では(a)のように、スンバワ方言では(b)のように表される。

(a) *Ali* *meng-ajak* *teman*
 Ali *meN-invite* *friend*

(b) *Ali* *ajak* *teman*
 Ali *0-invite* *friend*

(ii)標準インドネシア語では、接尾辞 *-kan* を自動詞語基に後続させて、使役を表すのに対して、他動詞 *kasih* 「与える」を用いて、同様の意味を表す。例えば、「手をきれいにしなさい」という内容が、標準インドネシア語では(a)のように、スンバワ方言では(b)のように示される。

(a) *bersih-kan* *tangan.*
 beautiful-caus hand

(b) *kasih bersih* *tangan.*
 give beautiful hand

1.3 スンバワ語をめぐる多言語状況

マレー語はマレー半島を含む東南アジア島嶼部で交易などに広く用いられてきた言語で、マレー語を中心にしてみれば、インドネシア語はマレー語の一変種（あるいは変種群）ということになる⁵。以下の記述では、スンバワにおけるマレー語の社会言語学的側面について述べる場合は「インドネシア語」という用語を、言語内的特徴について述べる際には「マレー語」という用語を用いる。

インドネシアの他の地域でそうであるのと同様、スンバワにおいても、公的機関においては原則としてインドネシア語が用いられている。ただし、実際の言語使用は都市部と農村部で異なる。都市部では、公的機関の構成要員に占める非スンバワ語話者の割合が高いことから、行政機関でも教育機関でも、もっぱらインドネシア語が用いられている。一方、農村部では、構成員の大多数がスンバワ語話者であることから、状況によってはスンバワ語の使用も観察される。行政機関では、中央から職員が派遣される機関（警察など）ではインドネシア語が用いられ、そうでない機関（村役場など）ではスンバワ語が用いられる傾向がある。また、書類や公的な会議・行事などではインドネシア語が用いられるが、職員同士、または職員と住民が対面で接する業務はスンバワ語で行われるケースが多い。教育機関でも、地域の実情に合わせて初等教育の三年間は地方語を使用することを国が認めているため、この期間はスンバワ語が主に用いられているようである。

都市においても、農村においても、地域や家庭においては、（書き言葉による伝達を除く）スンバワ語のみが用いられている。このため、年少者もスンバワ語を第一言語として習得している。ただし、フォーマルな位置づけを持つ言語活動は、公的機関の外で行われるものであっても、インドネシア語で行われることが多い。モスクでの説教や、結婚披露宴でのスピーチなど、多くの聴衆に向けて行う発話では、たとえ参加者がすべてスンバワ語話者であっても、インドネシア語が用いられる⁶。また、書きことばにおいてスンバワ語が用いられることはほとんどない。（スンバワ語は正書法も確立されていない。）たとえスンバワ語話者どうしの私信であっても、インドネシア語で書かれることが多い。

3.2 スンバワ県における他言語話者

スンバワ県では、スンバワ人住民が圧倒的多数を占めるが、他の民族も居住している。都市部には華人、アラブ人、バリ人、ジャワ人が多い。これらの民族は、多くが商業に従事している。（都市部で比較的大きな資本の事業を持っている者は、ほとんどが上述の民族

5 マレー語はマレーシア、シンガポール、ブルネイでも国語として扱われている。

6 スンバワ島の直西のササク語地域（ロンボク島）でも同様のことが言える。（多くの聴衆にむけての発話では、ササク語が用いられる。）このことは、ロンボク島より西に位置するバリ語地域、ジャワ語地域とは対照的である。バリ語地域、ジャワ語地域では、地方では、宗教的儀式においてはバリ語、ジャワ語が用いられている。

1.4 先行研究

のいずれかである。)また、スンバワ島東部のビマ人、小スンダ列島の東部に属する島(フローレス島、ティモール島など)からの移民や、ロンボク島からのササク人移民も多い。彼らはほとんどが商店の従業員や運送、建築などにかかわる労働者である。

農村部にはササク人の移民が多い。その多くは小作農である。

北部の沿岸部には、スラウェシ島南部から移民してきたブギス人の集落が点在する。また、北部の沿岸部、および、西部には1960年前後の政府の移民政策によって移住してきたバリ人の集落もある。ブギス人は主に漁業に、バリ人は主に農業に従事している。

これら他民族の言語使用は都市部と農村部で異なる。

都市部では、原則として各民族がそれぞれの言語を第一言語として保持する一方で、インドネシア語を第二言語として習得し他民族とのコミュニケーションに用いている。(都市部に住む若い世代の中にはインドネシア語を母語として用いているものもいる。)

農村部でも、同様に、各民族がそれぞれの民族の言語を第一言語としている。ただし、都市部での状況と異なり、彼らは、多数派であるスンバワ人とのコミュニケーションにおいてはスンバワ語を用いる。ササク人、ビマ人など近隣の民族だけでなく、中国人、アラブ人も定住している者はスンバワ語を用い、その運用能力は概して高い。(例外として、バリ人は、スンバワ語を使わず、スンバワ人との会話においてもインドネシア語を用いるとのことである。)

ただし、農村部においても母語が異なる他民族同士の会話(たとえばササク人とブギス人との会話)では、インドネシア語が用いられている。よって、スンバワ語は、農村部においては一定の優越性を持っているが、地域の共通語というわけではない。

4 先行研究

スンバワ語の先行研究には以下のものがある。

インドネシア文化教育庁は、1980年代に主要な地方語について辞書/文法書を出版する試みを行った。スンバワ語に関しても辞書 Sumarsono 他(1985)と文法書 Sumarsono 他(1986)が公刊されている。前者は、160ページからなるスンバワ語 - インドネシア語辞書である。この辞書は単語集に近い性質のもので、使用頻度の高い語に関して対応するインドネシア語の単語が記載されている。定義の正確さに問題はないが、対立する前舌半広母音/ɛ/と半狭母音/é/および後舌半広母音/o/と半狭母音/ó/の区別がされていないという音声表記上の問題点がある。後者は形態論を中心とした文法書で、巻末に文例集と一篇のスンバワ語による物語がついている。

これに加え、音韻論および形態論をやや詳しく扱ったものとして、Mahsunの研究がある。

Mahsun (1990) (「スンバワ語、Jereweh方言の形態論」)は、筆者自身の母語であるスンバワ語のJereweh方言の音韻論、形態論を扱ったもので、この方言の音韻体系と派生接辞の機能が扱われている。また、Mahsunはスンバワ語地域全体の調査も行っている。Mahsun (1999) (「スンバワ語の方言のバリエーション」)は、スンバワ語地域の30地点で採取された単語間の音の対応を基準に、スンバワ語の方言区分と各方言の音韻体系を示している。

以上の先行研究については本文中で必要に応じて触れる。

1.5 本研究の背景（データ）

5 本研究の背景（データ）

本研究のデータは、すべて筆者自身の現地調査によって得られたものである。筆者は、1996年から2004年の期間中、のべ約9か月間スンバワ県での調査を行った。

調査の拠点は、スンバワ県東部の町、ウンパン(Empang)、および、スンバワ県中心部の都市、スンバワ・ブサル(Sumbawa Besar)である。(両地点の位置に関しては、地図1-3を参照のこと)

本研究のデータは、次の五種類である。

- [1] 聞き取り調査で得られた単語
- [2] 聞き取り調査で得られた例文
- [3] 筆者が作った文に関して聞き取り調査で得られた話者のコメント
- [4] 日常の会話
- [5] 収集したテキスト（物語、会話）

[1]-[3]のデータを得るための聞き取り調査は、主に以下のスンバワ語話者の協力を得て行った。

Dedy Mulyadi (デディ・ムリヤディ)

男性 1975年 Empang 生まれ。両親はいずれも Empang の出身である。

1987(12歳) 家族の転居に伴い Taliwan に移る。

1990(15歳) 高校進学のためスンバワブサルに移る。

2000(25歳) 結婚のためスンバワブサル郊外の村 Desa Pungka に移る。

[1]に関する調査は東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所発行の言語調査票を用いて行った。得られた単語は参考論文『スンバワ語語彙集』としてまとめた。

[5]は以下の話者の協力を得て行った。協力者とテキストの一覧は表1-1に示す。

各テキストは日本語訳、逐語訳を付け、参考論文『スンバワ語テキスト集』としてまとめた。

テキストの解釈にあたっては、上記のデディ・ムリヤディ氏と共同で行った。

上記のテキストからの例文を本文中に引用する際は、各文にテキストの略号と文番号を付した。([]内が略号)

1.5 本研究の背景（データ）

表 1-1 調査協力者とデータとして用いたテキストの一覧

協力者名	出身地	テキスト
Agang Patawari 氏 (通称 Dea Ringgi) (男性、1930 年代 生まれ)	Empang 出身・ 在住	<ul style="list-style-type: none"> ・クレクレの話 Tutér Lalu KerékKuré [LK] ・スンバワの歴史 Sejarah Samawa' [SS] ・オランダ軍がスンバワへ侵攻を試みた話 Uji Coba [UC] ・平たい石 Batu Langléló' [BL] ・ミナの話 Si=Mina [Mina]
Herman 氏 (男性、1950 年代 生まれ)	Jotang 村 (Empang に隣 接する村) 出 身、 Empang 在住	<ul style="list-style-type: none"> ・ラナンマテの話 Tutér Lanang Mate [LM]
Drs.Ibrahim (男性、1950 年代 生まれ)	Empang 出身・ 在住	<ul style="list-style-type: none"> ・亀と猿の話 Tutér endé=Kakura ké endé=Bóté [Kakura]
故 Abdul Azis 氏 (男性、1950 年代 生まれ)	Sumbawa Besar 出身	<ul style="list-style-type: none"> ・白い血の候 Datu Puti Geti [DPG]
Dedy Mulyadi 氏 (男性、1975 年生 まれ)	後述	<ul style="list-style-type: none"> ・長い墓 Kubér Béló [KB]
故 Siti Hawa 氏 (通称 Papin Awak) (女性、1920 年代 生まれ)	Empang 出身・ 在住	<ul style="list-style-type: none"> ・アワックおばあさんの昔話 [PA] ・ワジックの作り方 Wajék [wajik] ・ご飯の炊き方 Cara tu=mongka' [mongka] ・クチプットの作り方 Kecipót [keciput] ・竹筒ご飯の作り方 Timong [timong]